

大学史としてのキャンパス前史(1)

— 旧長野県庁とその表門 —

福島 正 樹 (信州大学大学史資料センター)

はじめに

2017年4月に大学史資料センター(以下センター)が発足して4年を経過しようとしている。発足当初は、まずは70周年記念事業(以下記念事業)のなかで、卒業生からの寄贈資料と、大学に残された歴史資料の所在確認と情報の収集に心がけてきた。センターの活動方針については、発足の初年度である2017年度に活動の方向性についての見通し的な論考をまとめ^{注1)}、それを指針に活動をしてきた。

記念事業も一段落した昨年11月、それまでの2年半の活動を総括し、学術情報・図書館委員会での審議と役員会での承認を経て、これまでの活動を継続しつつ、新たに「信州大学100年史」を視野に活動を展開することとなった^{注2)}。

創立100年をにらんだ長期的な活動をどう具体的に進めていくか、しばらくは具体的な日常活動の成果を報告していく必要があるが、まずは大学の歴史と地域の歴史がどのように関係するのか、あるいは大学史研究がもたらすであろう地域史研究の成果とは何かといった点に留意して、いくつかの問題を明らかにしていきたいと思う。

1. 新制国立大学とキャンパス

(1) 新制国立大学のキャンパス

第二次世界大戦終結後の日本において、学制の改革が行われ、戦前の複線式学校体系を単線式に改め、大学については教養課程を組み込み、さらに教員養成の改革を含む改革が行われた。連合軍総司令部の民間情報教育局は文部省を通じて関与し、都道府県単位に旧制の帝国大学、単科大学、専門学校、高等学校、師範学校などを母体とする学部からなる新制国立大学が誕生した。したがって、発足当初の新制国立大学のキャンパス・建物は、原則として大学を構成した旧制の各学校のそれを引き継ぐこととなり、キャンパスが地理的に分割された状態で存在する場合も多かった。

各新制国立大学における大学史を考えると、大学による違いはあるものの、キャンパスの統合や施設・設備の充実が共通する問題となった背景にはこうした事情が存在したことに留意する必要がある^{注3)}。

(2) キャンパス研究の意義

先に述べたように、日本における戦後の新制国立大学は、旧制の高等教育機関を前身校として成立したという共通の特色を持っている。したがってキャンパスもそれぞれの前身校のそれを利

用することとなった。キャンパスの統合をはかるにしろ、本学のように前身校のキャンパス配置を前提とした大学運営を継続するにしろ、キャンパスのあり方は、現在に至る大学の歴史を如実に示している。したがって、その歩みを丁寧にたどることは、大学史の重要な一側面を構成する。

信州大学の5つのキャンパス^{注4)}と1つの旧キャンパス^{注5)}が検討対象となるが、すべてを一度に考察することはできないので、手始めとして、教育学部の所在する長野（教育）キャンパスについて考察することから始めたい。

2. 長野（教育）キャンパスの地にあった旧長野県庁

(1) 長野（教育）キャンパスの歴史概観

信州大学教育学部のある長野（教育）キャンパス（以下キャンパスと略称）は、前身校である長野師範学校（含む附属学小学校）の敷地を受け継いでいる。しかし、この地には師範学校以前にさかのぼる歴史が存在していたことを忘れてはならないだろう。

元々畑地であったこの地に、1874（明治7）年、長野県庁舎が新築移転、その後1908（明治41）年の火災を契機に南長野の地に移転するまで県庁があった。続いて、1887（明治20）年、長野県尋常師範学校が旭町（現在の長野市立図書館の地）から県庁の西側に新築移転、さらに1894（明治27）年にはその西側に長野県立尋常中学校が新築移転する^{注6)}など、次々に長野県の教育施設が建てられていった。

明治41年の県庁火災は、その後のキャンパスの歴史に大きな影響を与えた。移転後の県庁跡地に長野県師範学校附属小学校が新築移転、1941（昭和16）年には附属国民学校と改称し、県立長野中学校が上松に移転した跡地の校舎と、その西側に新校舎を建設して移転した。

第二次世界大戦後、新学制により長野師範学校は信州大学教育学部となり、新たに附属長野中学校が誕生、師範学校の東端（旧長野県庁、附属小学校の地）を校舎とした。昭和30年代になり、師範学校時代の校舎の老朽化のために校舎新築などキャンパスの整備が行われ、附属長野中学校もキャンパス西端に移転した。その後、附属長野中学校は昭和54年、附属長野小学校は平成9年に長野市南堀の新キャンパスに新築移転した^{注7)}。

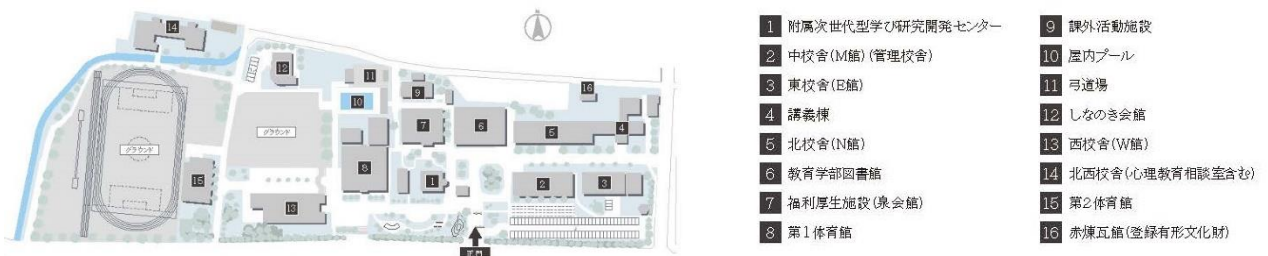


図1 現在の長野（教育）キャンパス（『信州大学大学概要 2020』）

1874（明治7）年の長野県庁舎の建設以来現在に至るまで、この地には様々な歴史があった。その150年にも及ぶキャンパスの歴史全体を扱うことはできないので、その初期に焦点を絞り、旧長野県庁舎とその表門に焦点をあてて考察を加えることとしたい。

特に、旧県庁の表門は、歴史の変転をくぐり抜け、廃棄される危機も乗り越えて保存され、後述するように、附属長野中学校が西長野の地から長野市南堀への移転に際して移設され、はじめ北口通用門の門として、令和2年4月には正門後方へと移され、その歴史的価値を保存することになったことは記録にとどめておく必要がある。どのような歴史的経緯があつて残されるに至ったのか、これも可能な限り記録にとどめておく必要がある。

過去からの遺産は、常に時代の波にもまれる中で消失の危機と隣り合わせであることが多い。この地にあった様々な歴史的遺産の中で、県庁の表門は活用・保存され、また明治28年に県庁書籍庫として建設されたレンガ造りの建物もキャンパス内に残されている^{注8)}。

以下、キャンパスの東側にあつた旧長野県庁の庁舎と表門について考察する。それを踏まえ、表門がたどったその後の歴史についても最後にふれたい。

（2）長野県の成立

1871（明治4）年7月14日、明治政府は廃藩置県を断行、中央集権体制の確立へと舵を切った。信濃国内では、北信が松代・飯山・須坂・上田・小諸・岩村田・椎谷（一部）の7県、南信が松本・高島・高遠・飯田・名古屋（一部）の5県、あわせて12県が成立した。一方これより早く、信濃の旧幕府領・旗本領については、1868（慶応4・明治元）年、全体を伊那県として統合、支配した。1870（明治）3年に東北信分を中野県として伊那県から分割、1871（明治4）年6月に長野県（第1次）と改称した。こうして、廃藩置県時には信濃には伊那県と長野県の2県に12県を加えた14県が存在することとなった。

同年11月、政府は全国の府県の改廃を行い、「信濃国」のエリアに長野県に北信諸県を合わせた長野県（第2次）と、伊那県に南信諸県、さらには飛騨国分を合わせて改称した「筑摩県」の二つの県が置かれることとなった。

長野県は中野県から長野県になった際に県庁がおかれた水内郡長野村西方寺を引き続き県庁としたが、手狭だったことなどから、1872（明治5）年に新しい県庁の建設を政府に申請、許可を得て1874（明治7）年10月、西方寺の西の長野村と腰村の地に移転新築した^{注9)}。

（3）明治期の長野県庁舎に関する文書と画像

明治7年に新築された長野県庁舎については、文書と古写真が残されている。文書については表1のとおりで、いずれも県立歴史館の行政文書で、県庁舎の建築や増築等について記されている^{注10)}。このうち、1～9までが明治7年完成の県庁舎建築に関わる文書で、10～15までが修繕や増築、15が1908（明治41）年の庁舎焼失後の新築関係文書である^{注11)}。

なお、小林英一氏はこれらの文書を用いて県庁舎の建築について詳しく検討している^{注12)}。

表 1. 長野県行政文書（県立歴史館所蔵）のなかの明治期県庁建築関係文書一覧

	資料名	資料の種類	部署（課）	請求記号
1	長野県庁新規建営御入用積帳（明治5年7月）（全）	行政文書	旧長野県庶務課関係	明5/2A/17
2	県庁建築一件（明治5年10月）	行政文書	旧長野県庶務課関係	明5/2A/18
3	県庁其他御建営一件留（明治4年12月～同6年）（全）	行政文書	旧長野県庶務課関係	明6/2A/8
4	県庁新築一件（明治7年1月ヨリ）（全）	行政文書	旧長野県 庶務課関係	明7/2A/11
5	県庁建営枢要録（明治7年2月）（全）	行政文書	旧長野県 庶務課関係	明7/2A/12
6	県庁新築回議留（明治7年7月）（全）	行政文書	旧長野県 庶務課関係	明7/2A/13
7	県庁新築諸願伺届御廻済共書類綴込（明治7年2月ヨリ）	行政文書	旧長野県 庶務課関係	明7/2A/14
8	県庁敷地牢屋敷買上調書并新道開鑿及地目変換願ノ件（明治4年～8年）（全）	行政文書	旧長野県庶務課関係	明8/2A/15
9	県庁建築一件（明治8年5月）（全）	行政文書	旧長野県庶務課関係	明8/2A/16
10	県庁内建継書類（全）	行政文書	第3課（租税・土木）関係	明11/C/20
11	県庁及郡長諸願並取調上申日誌 若里村戸長役場	行政文書	庶務課（庶務・戸籍・社寺）関係	明16/A/19
12	県庁舎修繕之部（全）	行政文書	土木課関係	明17/G/5
13	県庁舎営繕金高帳（明治20～21年）（全）	行政文書	第2部 土木課関係	明21/3A/2
14	二十三年度県庁舎修繕費之部（全）	行政文書	第2課（農商・土木・地理）関係	明24/2B/15
15	県庁舎・長野測候所・監獄庁建築回議（全）	行政文書	第2課（農商・土木）関係	明27/2B/15
16	県庁舎工事施工伺（明治44年1月）（全）	行政文書	土木課関係	明44/2B/10

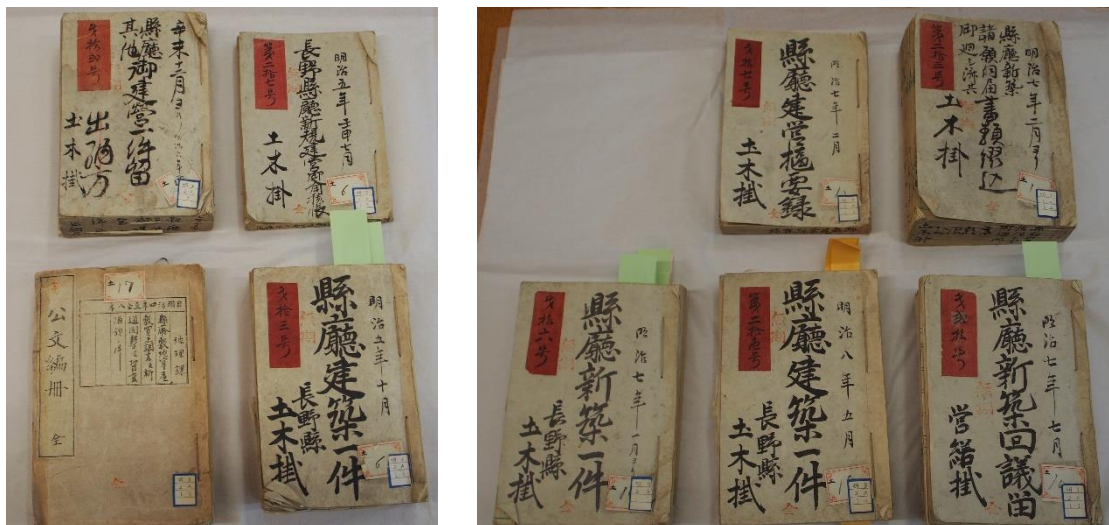


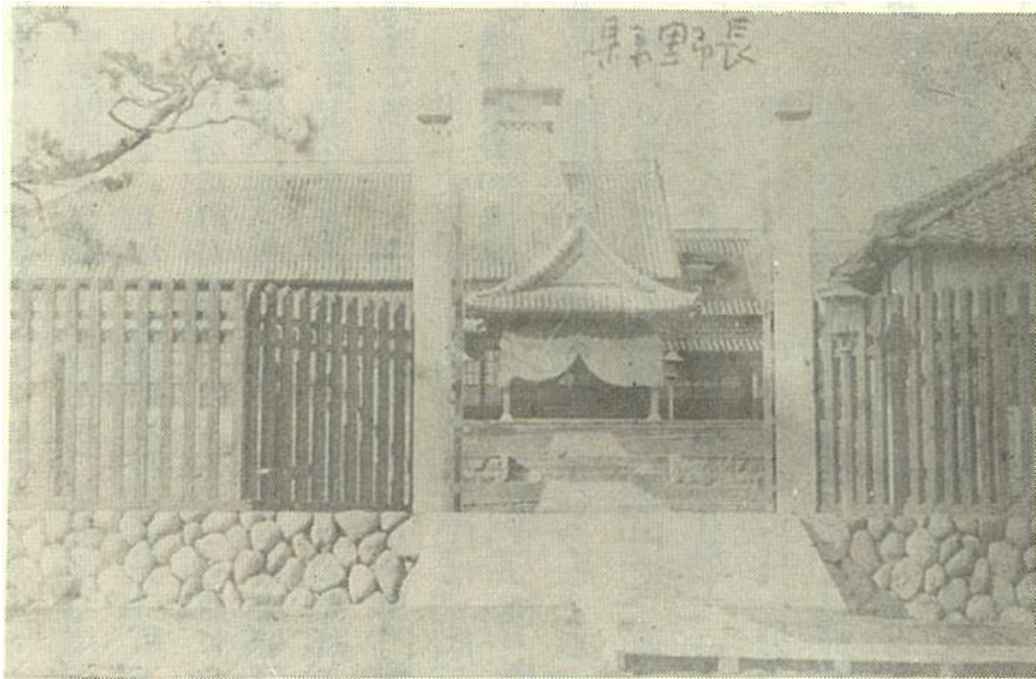
写真 1 明治 7・8 年の県庁建築関係文書（表 1-1～9）

大学史としてのキャンパス前史（1）― 旧長野県庁とその表門 ―

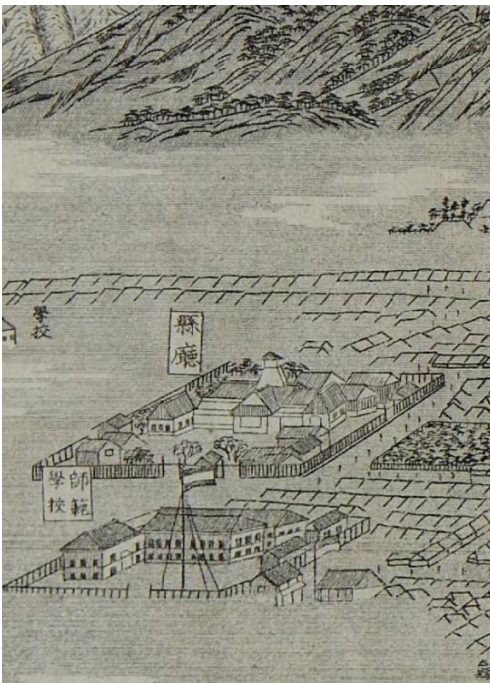
以上は建築関係の文書であるが、一方で、明治期の県庁舎の古写真についても触れておく必要がある。現在知られるものを表2に画像資料を11点挙げた。なお、表2は以下での検討結果を反映させて記載している。

表2. 明治期の長野県庁舎に関する画像

画像記号	資料（写真）名	年代	所蔵	写真提供（出典）
A	旧長野県庁舎及び初代表門（A）	明治7年頃	長野市立博物館（旧藤井家所蔵）	『長野』86号口絵、『わが町の歴史 長野』
B	旧長野県庁鳥瞰図	明治11年	県立長野図書館	『善光寺繁盛記』・信州ナレッジスクエア
C	旧長野県庁舎及び初代表門（C）	明治11年頃	県立長野図書館	旧郷土資料陳列室資料（「信濃御巡幸録」資料（一））
D	旧長野県庁舎	明治11年頃	県立長野図書館	旧郷土資料陳列室資料（「信濃御巡幸録」資料（一））
E	旧長野県庁舎及び初代表門（E）	明治17年以降	長野市立博物館	旧藤井家所蔵資料
F	旧長野県庁舎及び初代表門（絵）	明治26年頃	国立国会図書館デジタルアーカイブ	『長野土産』明治26年刊
G	旧長野県庁舎及び2代表門（G）	明治33年	県立長野図書館	『善光寺案内』・信州ナレッジスクエア、
H	旧長野県庁舎及び2代表門（H）	明治37年	県立長野図書館	『長野繁盛記』・信州ナレッジスクエア
I	旧長野県庁舎及び2代表門（I）	明治39年	県立長野図書館	『善光寺案内』・信州ナレッジスクエア、なお、明治33年刊行のものに掲載された写真も同一のものである。
J	旧長野県庁舎及び2代表門（J）	明治41年	信州大学附属図書館	『一府十県連合共進会記念写真帖』（明治41年）
K	旧長野県庁舎及び2代表門（K）	明治41年頃	長野県立歴史館	長野県史建築編写真。明治41年開催の一府十県連合共進会記念写真と同じ写真

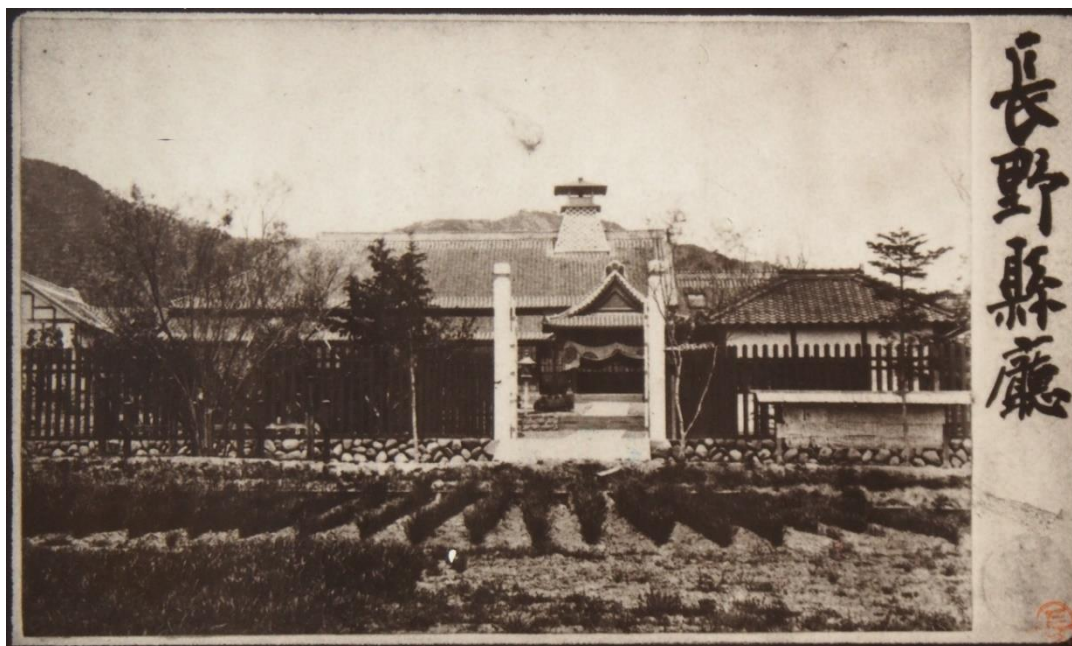


<画像 A> 旧長野県庁舎及び初代表門（明治7年～17年）
（出典：「旧藤井家資料」、『長野』第86号口絵）



<画像 B> 『善光寺繁盛記』初編（明治11年）にみえる県庁
（出典：『善光寺繁盛記』 信州ナレッジスクエア をトリミング）

大学史としてのキャンパス前史（1）― 旧長野県庁とその表門 ―



<画像 C> 旧長野県庁舎及び初代表門（明治 11 年頃）
（出典：県立長野図書館 信濃御巡幸録資料（一））



<画像 D> 旧長野県庁舎（明治 11 年頃）
（出典：県立長野図書館 信濃御巡幸録資料（一））

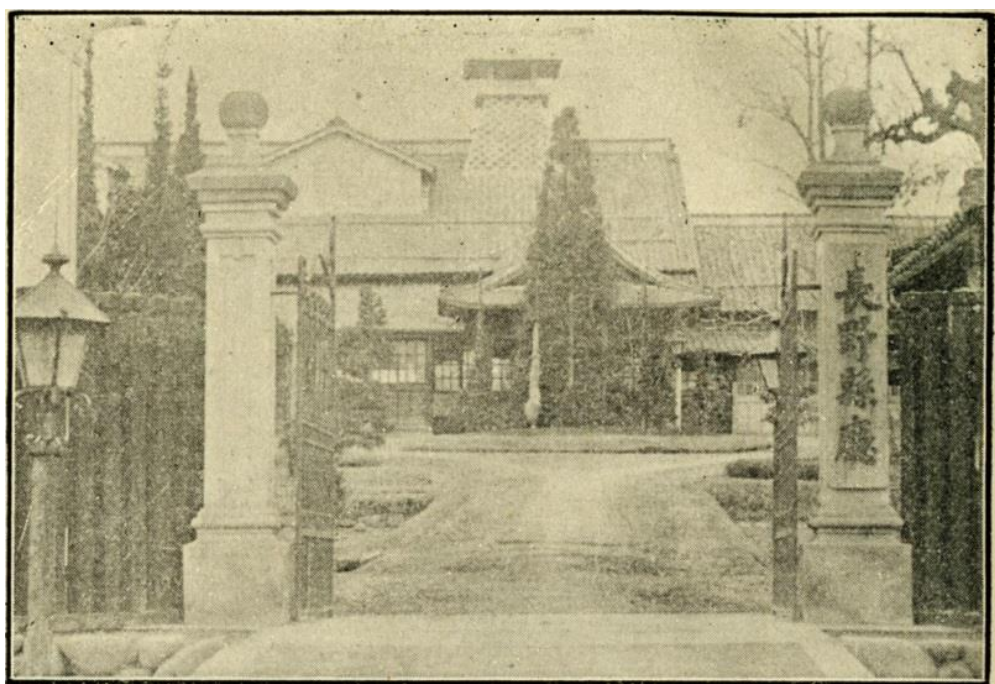


<画像 E> 旧長野県庁舎ならびに初代表門（明治17年～30年代前半）
（出典：長野市立博物館所蔵旧藤井家資料）



<画像 F> 『長野土産』（明治26年）に描かれた長野県庁
（出典：国立国会図書館デジタルアーカイブ）

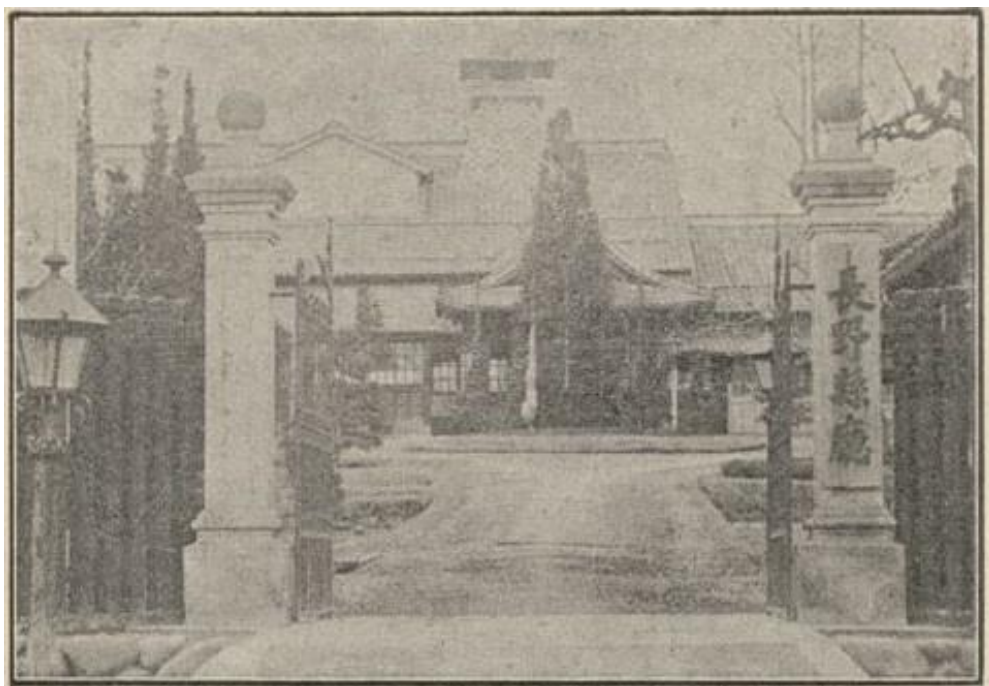
大学史としてのキャンパス前史（1）― 旧長野県庁とその表門 ―



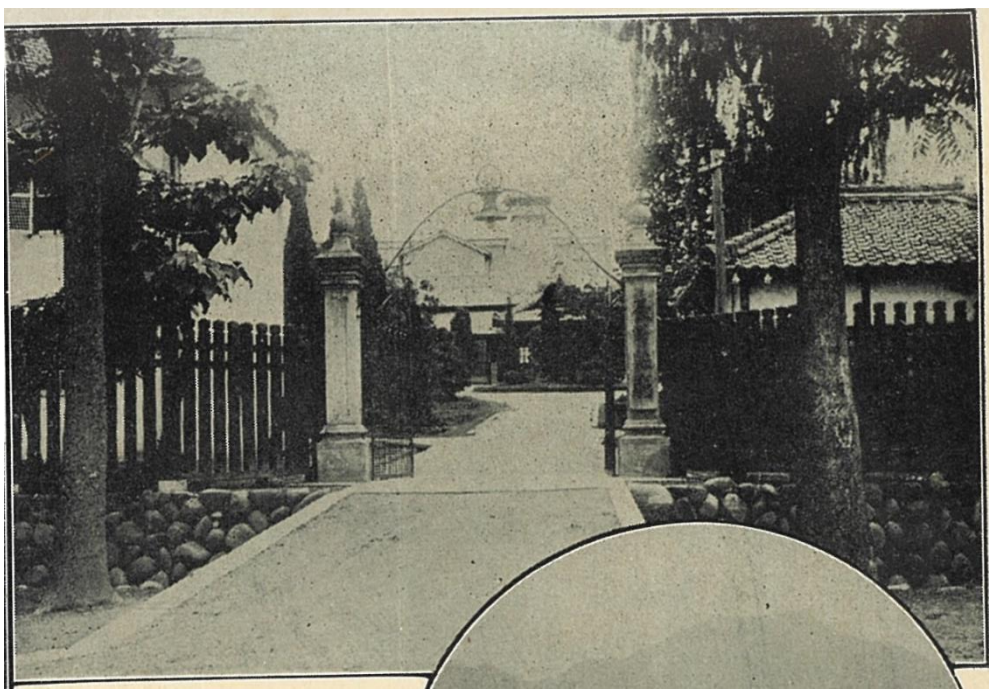
<画像 G> 『善光寺案内』（明治 33 年版）に載る県庁舎及び 2 代表門
（出典：信州ナレッジスクエア）



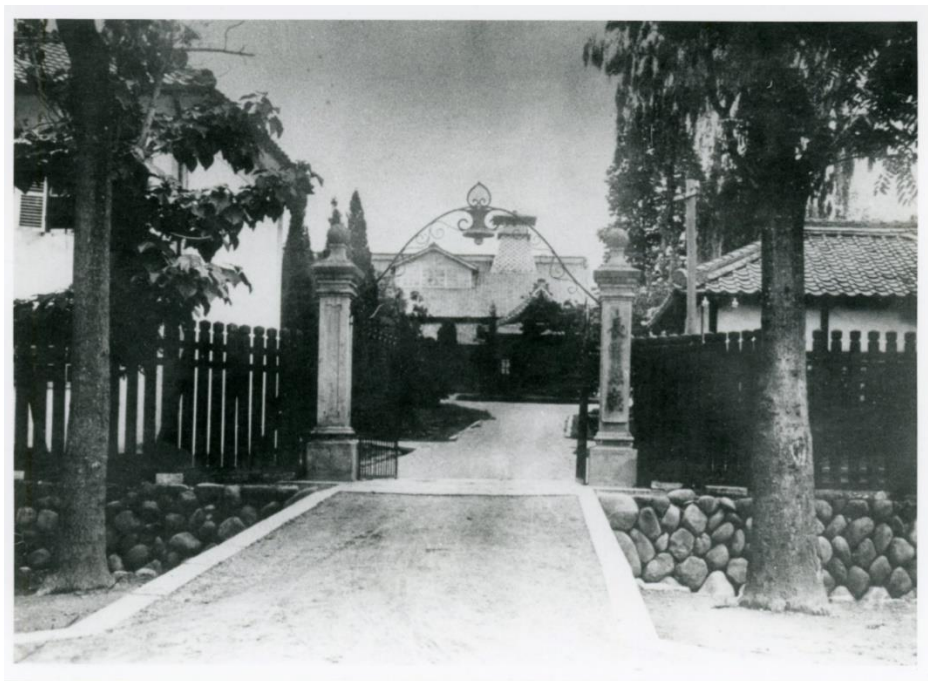
<画像 H> 『長野繁盛記』（明治 37 年）に載る県庁舎及び 2 代表門
（出典：信州ナレッジスクエア）



<画像 I> 『善光寺案内』（明治 39 年版）に載る県庁舎及び 2 代表門
（出典：信州ナレッジスクエア）



<画像 J> 旧長野県庁舎ならびに 2 代表門
（出典：『一府十県連合共進会写真帖』（明治 41 年）収載写真をトリミング）



<画像 K>旧長野県庁舎ならびに2代表門（明治41年頃）
（出典：県立歴史館・県史建築編写真）

① 明治7・8年の県庁舎新築関係文書

まず文書から知られる県庁舎新築の様子を小林氏の論考を参考にしつつ概観しておこう。

明治政府が県庁の新築を許可したのは1872（明治5）年11月18日であった^{注13}。明治6年には建設地の決定に手間取ったが、水内郡長野村と腰村の畑地に決まった。7年に入って県域6郡から責任者山田庄左衛門はじめ8人の世話人（郡中惣代）が決まり、5月までに地ならしがほぼ出来あがり、建築に取り掛かった。

新たに作られた敷地の周りは「悪水抜」「下水抜」の石垣を巡らせた。本庁舎の建坪は248.33坪、建物の様式は、概観は和風建築を基本とした。屋根は瓦葺き、壁は外回りは白漆喰仕上げ。建物内の建具にはガラス障子を用い、重畳（絨毯）・段通が敷かれるなど洋風の要素も取り込まれている。1階が政務を行う場所で、土足対応となっていた。また、屋根の上には高さ2間の「火の見」（写真2）が置かれていた^{注14}。

表門は西洋風鋳物を取り付けた「西洋風冠木門」で^{注15}、「白ヘンキ塗」、門の周りは「角柵」を巡らしている。このほか、糾弾所、「表門外、通用門三ヶ所」、門番所、仮牢、物置、腰懸、板塀、雪隠、馬建などの施設があったことがわかる（写真3・図2）。

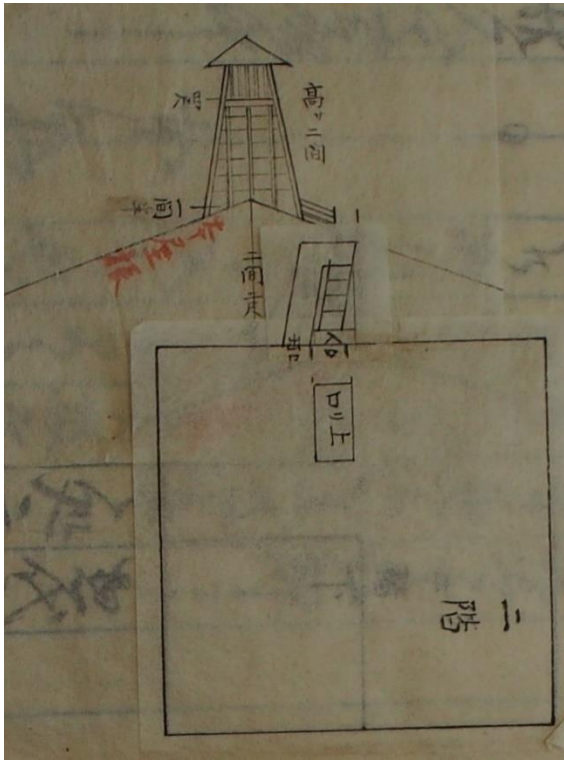


写真2 「火の見」（「県庁新築一件」 表1-4）

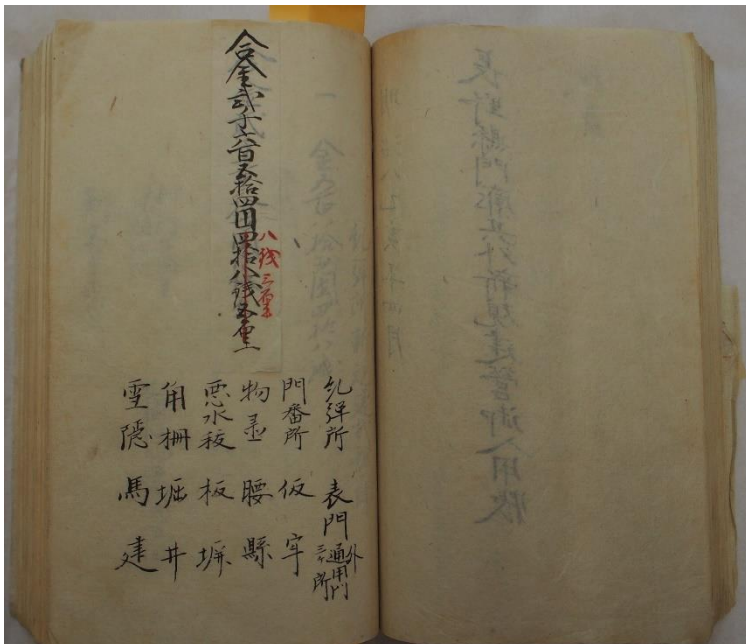


写真3 県庁の建物（「県庁建築一件」 表1-9）

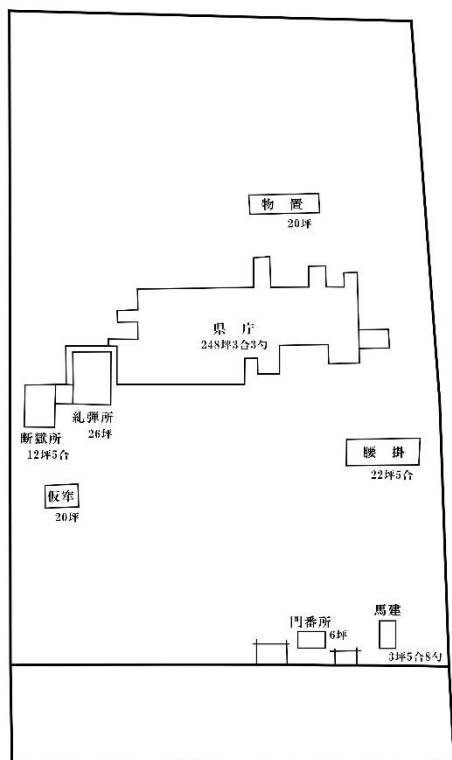


図2 「県庁建坪図」（県立歴史館 絵図・地図2-10-2）のトレース図（田中圭美作図）

② 明治期の県庁舎に関する画像

文書でわかる県庁新築の概要は以上のようなのだが、次に表2の11点の画像（写真・絵）に関して詳しく検討したい。

まず、画像A・Eは長野市立博物館に所蔵される旧藤井家所蔵の長野県庁の写真である。両者ともかつて小林計一郎氏が紹介した資料で^{注16)}、いずれも南側から表門^{注17)}越しに県庁舎の正面を撮ったものである。小林氏はAを「落成直後のもの」、Eを「明治35年ころのもの」としている。なおEと内容も構図も同じ画像にFがある。これは写真ではなく、1893（明治26）年刊行の『長野土産』の挿絵である。画像Eが明治35年ころではなく、明治26年以前に遡るものであることが理解できる。

次に画像B・C・D・G・H・Iは県立長野図書館に所蔵される資料である。Bは1878（明治11）年刊行の『善光寺繁盛記』に載せられた長野町域の鳥観図から関係部分をトリミングしたもので、略図ながら県庁の建物の様子を理解することが出来る。先に示した図2と対比すると、新築当時からすると、若干の建物が増築されていることが読み取れる。注目すべきなのは、図2とあわせて考えると、注17でも触れたように、南側には表門以外に通用門があることである。ただし、通用門を撮影した画像は残されていない。

Cは明治11年の明治天皇北陸巡幸に関係した資料で、「信濃御巡幸録」資料（一）」に収録さ

れた「長野県庁」と題されたものである。『県立長野図書館郷土資料陳列室所蔵品目録』の解説には、「明治十一年當時の長野縣廳」と記されている^{注18)}。

DはCと同じ時に、角度を変えて県庁の南東側から撮ったものである。DとCの写真には通用門は写っていないが、おそらく両者の写真の範囲から外れたところにあったものと推定される。

G・H・Iは、A・Eと同様に南側から表門を手前に県庁舎の正面を撮ったもので、Gが1900（明治33）年の御開帳に際して刊行された『善光寺案内』に掲載されたもの、Iが6年後の1906（明治39）年の御開帳の際に同名の書籍に掲載されたものである。両者比べると、全く同じ写真であることから、明治33年の写真を39年でも使用したことがわかる。なお、庁舎と門の形状をみると、庁舎の屋根、表門などで画像A・C・E・Fと異なる点があることがわかる（後述）。一方、Hは1904（明治37）年刊行の『長野繁盛記一名善光寺案内』に掲載されたもので、G・Iの門柱にはないアーチ型の装飾と電灯（後述）が付いていることがわかる。ここから、HはFの再利用であることが理解される。

画像Jは、1908（明治41）年に開催された「一府十県連合共進会記念写真帖」（長野県協賛会刊 明治41年）に掲載された県庁舎である。共進会は明治41年9月20日に開幕したが、この年の5月10日に失火により焼失している。ここに写された県庁舎は最後の姿というべきであろう。

画像Kは、県立歴史館所蔵で、画像Jと撮影角度や撮影内容が同一であることから、明治41年頃の撮影であることが推測できる。この写真は『長野県政史』第1巻（長野県 1971年）、『長野県史』通史編第7巻近代1など、明治期の長野県庁舎の写真として最も流布しているものである。

（4）明治期の長野県庁舎の移りかわり

前項では、表2の11点の県庁舎の画像について紹介したが、本項では時間の流れに沿ってその内容を整理してみたい。

まず、表2は以下で得られる検討結果を踏まえ古い順に並べたが、まず全体で大きな変化のない部分は次の点である。いずれも庁舎を正面（南側）から撮影したもので、庁舎の敷地南側に石垣が組み、石垣が組みれた地点と手前側がスロープになっていること。入り口には表門があり、その左右には木柵が建てられ、おそらくは県庁を囲んでいること。県庁舎は和風建築に洋風の要素を取り入れたいわゆる擬洋風建築で、屋根に「火の見」が付けられていることなどの共通点が確認できる。1874（明治7）年の新築時から1908（明治41）年の焼失時まで県庁舎本体（本館部分）は大きな変化なく維持されていたことがわかる。

一方、変化の見られる部分もある。まず変化がよくわかる表門をみると、A～Fまでの明治前期と、G～Kまでの明治後期とに二分できる。

① 明治前期の庁舎と初代表門

A～Fまでの表門は、やや細長く白く塗られたようすが確認できる。これを庁舎建築に関する文書により詳しくみると、門柱は高さ12.4尺（約3.7m）で、柱の下に杓石を据え、柱の材料は槻（幅1.4尺と1尺）であったことがわかる。なお画像には写っていないが、柱の裏側にあったと

推定される控柱と控貫は杉材、扉には「西洋風鉄物」を取り付けたことになっている。門は全体を白いペンキで塗った（『県庁建築一件（明治8年5月）』 表1-9）。画像からも白い色が読み取れることと齟齬が無いことがわかる。

次に、E・Fでは門に掛けられている「長野縣廳」の表札が、A・B・Cにはないことがわかる。また、E・Fには門の左側にポリスボックス風の建物が建てられている。この建物については、1884（明治17）年に新たに設置されたもので、「表門巡查立番所」と呼ばれたことがわかる（『県庁舎修繕之部（明治17年）』 表1-12。写真4）。一方、Fが明治26年刊行の『長野土産』に掲載されていることを考えると、Eは明治17年から26年の間のものであることが確定できる。表札も同じ場所に掛けられたかのではなかろうか。



写真4 表門巡查立番所（「県庁舎修繕之部（全）」 表1-12）

A~Fの間の変化で、次に指摘できることは、表門から入って庁舎に至る間の石垣についてである。A・B・C・Dは、表門から入って庁舎に至るまでが2段になっていて、そこには石垣と通路に階段が付けられている。一方、E以降は（G~Kを含め）1段目の石垣の存在は認められるものの、通路部分は階段が無くなり、スロープになっていることがわかる。なお、この1段目の石垣は、明治44年に県庁舎の跡地に建設された附属小学校の敷地（運動場）にも引き継がれていたことがわかる（写真5）^{注19）}。

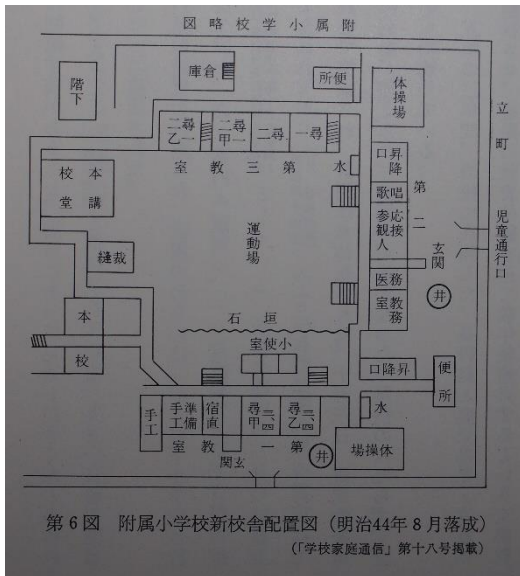


写真5 明治44年落成時の附属小学校の校舎配置図（『信州大学附属長野小学校百年史』）

ちなみに現在のキャンパスの北東には、「赤レンガ館」と呼ばれ国の登録有形文化財に登録されている建物がある。これは1895（明治28）年建設の旧長野県庁書庫（写真6）で、県庁が移転した後も師範学校の書庫として利用され、現在にまで保存されてきたものである（写真7）。



写真6 旧長野県庁書庫図面
（表1-15）



写真7 教育学部赤レンガ館（旧長野県庁書籍庫）

なお、写真7をみると、赤レンガ館の高さが、手前のキャンパスよりも数メートルの比高があることが確認できる。キャンパスは、県庁が立地した当初は、北から南に向かった傾斜地となっていて、そこに県庁舎を建てるために石垣を何段か組んで平地をつくったことがわかる。

現在、キャンパスの主要部は平坦になっていて、明治時代の地形を想像することは難しいが、

平坦部と赤レンガ館の高さの違いをみると、かつてこの地が北から南に傾斜する土地であったことを推測することができる。

さらに、敷地内の建物について見てみる。Aの表門の右側にある建物は、図2にみえる「門番所」と思われるが、E・Fになると表門の左側に白い壁に窓が付いた建物が新たに確認できる。窓の位置からするとこの建物は二階建てと思われる。これと関係するかと思われるが、Bの鳥瞰図には表門の左側に2棟の建物が描かれている。この建物がそれにあたるとすれば、明治11年までに建てられたものと推定することができる。

② 明治後期の庁舎と2代表門

次にG～Kの画像の検討である。まず、庁舎についてGを見ると、屋根に当初の望楼に加え、左側に屋根から破風が付いた小屋根が突き出している。用途や増築時期については、Cに確認できないことから、1878（明治11）年以降とするほかはないだろう。

次に、A～Fまでの初代表門に替えて形状の異なる表門が確認できる。その基本的形状はG～Kまで変化はない。これこそ、県庁移転後も附属小学校正門を経て、現在附属長野中学校の正門の裏に保存されている門柱である。



写真8 附属長野中学校正門裏にある旧長野県庁表門

初代表門が確認できる最後の資料はFの1893（明治26）年で、2代表門の初見がGの1900（明治33）年であることから、この7年の間に設置されたものと推定できる。材質は石製^{注20}で、画像から判断するに鋳鉄製の門扉が付けられている。

もう一つ、2代表門については、H・J・Kでは門柱にアーチ状の金具が取り付けられ、その真ん中に電灯状のものが下向きに付けられていることが確認できる。また、J・Kには右側の門柱

の脇に電柱と腕木に付けられた碍子が確認でき、門番所の軒にも碍子が付けられている^{注21)}。ここから、明治33年から37年の間に門柱に電灯をともし設備が付け加えられたことがわかる。なお、附属長野中学校に伝存する門柱には、門扉を取り付けた金具の跡のほか、アーチ状の金具を取り付けた痕跡も確認できる(写真9)^{注22)}。



写真9 門扉とアーチ状の金具を取り付けた痕跡

もう一つこれらの画像(A・C・D・E・G・I)に映っている「石油ランプ」について触れておきたい。まずAには表門の右側の石垣と柵の間に1つ、庁舎玄関水脇に1つ確認できる。Cでは、表門右側と門を入れて最初の石垣の左側に確認できる。Dは県庁の東南隅からの画像だが、その東南隅の柵の外に確認できる。Eは、表門右側のみ確認できる。G・Iでは表門左手前の石垣の下に1つ、Aと同じ庁舎玄関水脇に1つ確認できる。J・Kでは石油ランプは確認できない。

いずれの石油ランプも支柱の上に笠付きのランプが付く形になっていて、その形状もほぼ同一のものと考えられる^{注23)}。

3. 旧長野県庁2代表門のその後

現在、附属長野中学校正門裏にある2代表門について、キャンパスの変遷との関係で簡単にその歩みをまとめておきたい。

この門は、明治26年から33年の間に初代表門に替えて設置され、明治41年旧県庁が火災のため現在地(長野市南長野字幅下)に新築移転した後も、県庁跡地に新築移転してきた長野県師範学校附属小学校の正門として昭和10年代まで使われた。

一方、師範学校の西に置かれた長野県長野中学校(1899年に長野県尋常中学校を改組・改称し

大学史としてのキャンパス前史（1）― 旧長野県庁とその表門 ―

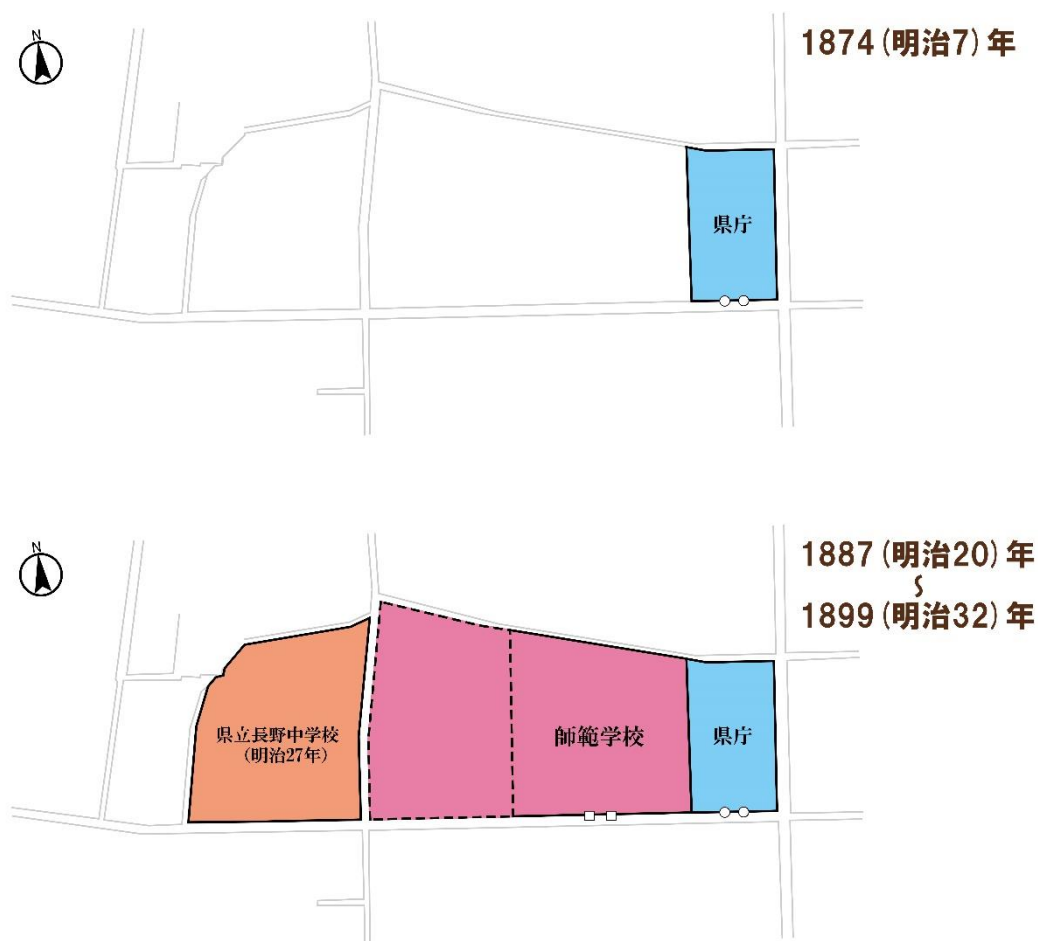
て長野県立長野中学校とし、1920年に長野県長野中学校と改称）は、昭和15年、長野市上松の地（現在の長野県長野高等学校の地）に新築移転した。そして、昭和16年、附属小学校が附属国民学校になると、長野中学校跡地の旧校舎に移転をはじめ、18年12月に移転を完了した。

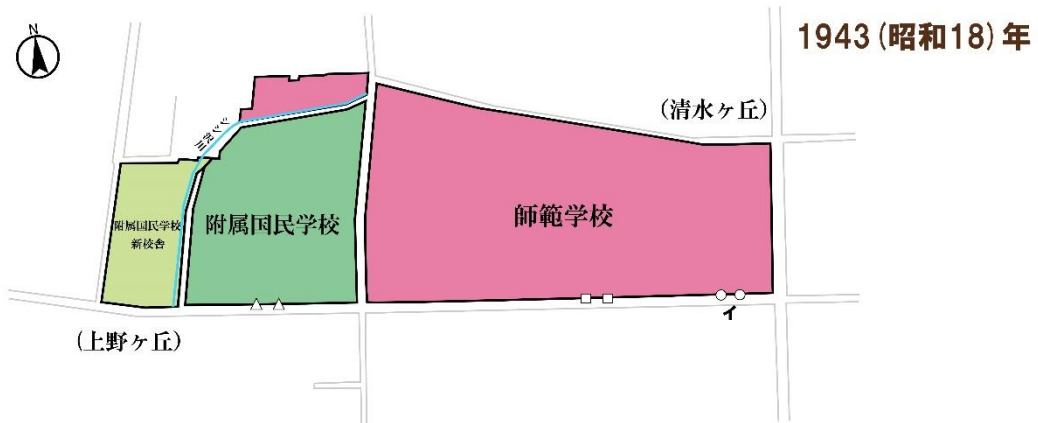
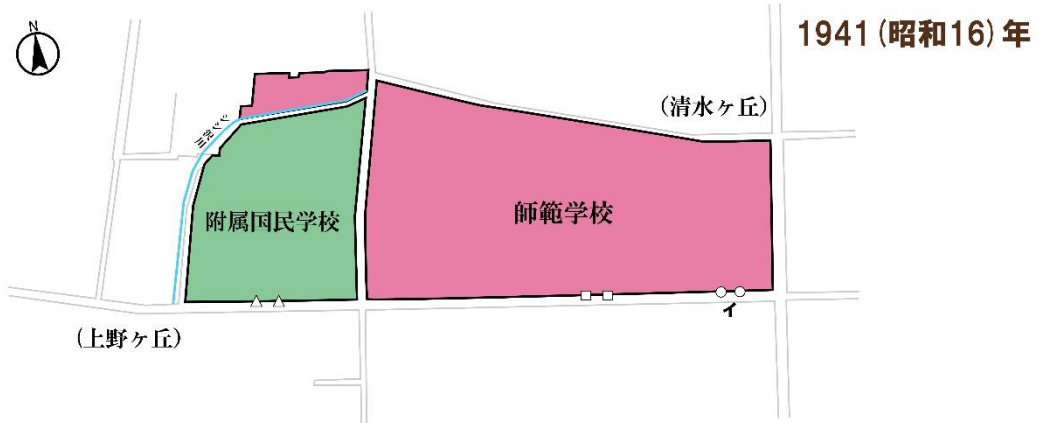
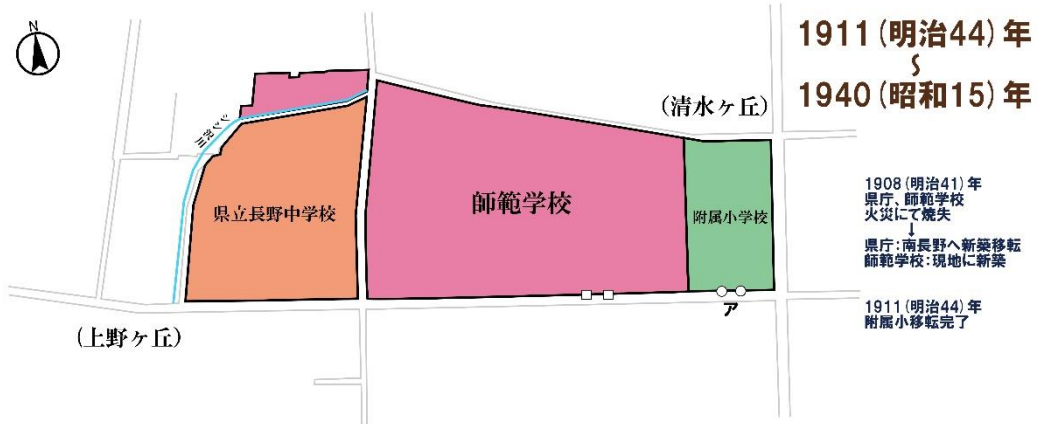
更に、昭和18年、長野県師範学校は官立長野師範学校に改組、かつての附属小学校の正門は師範学校の東門として存置されることとなったのである。

戦後、新学制で昭和22年4月に附属中学校が創立されると、もともと建っていた位置から幾度か移設しつつ（後述）も、附属中学校の門として使われ続け、附属中学校の現在地（長野市南堀）への移転に際しても、その北門として移設され、2020年4月、現在地に移設するなど長く大切に保存されている。（図3）

全国的に見ても、これほど明治期の県庁表門が現在にまで保存・活用されている例はめずらしい^{注24}。いずれ旧長野県庁書籍庫同様、国の登録有形文化財に登録される資格は十二分に備えていると言えよう。

『信州大学教育学部附属中学校五十年史』に掲載された写真を図3と合わせ、その歩みを確認しておきたい。





大学史としてのキャンパス前史（1）— 旧長野県庁とその表門 —

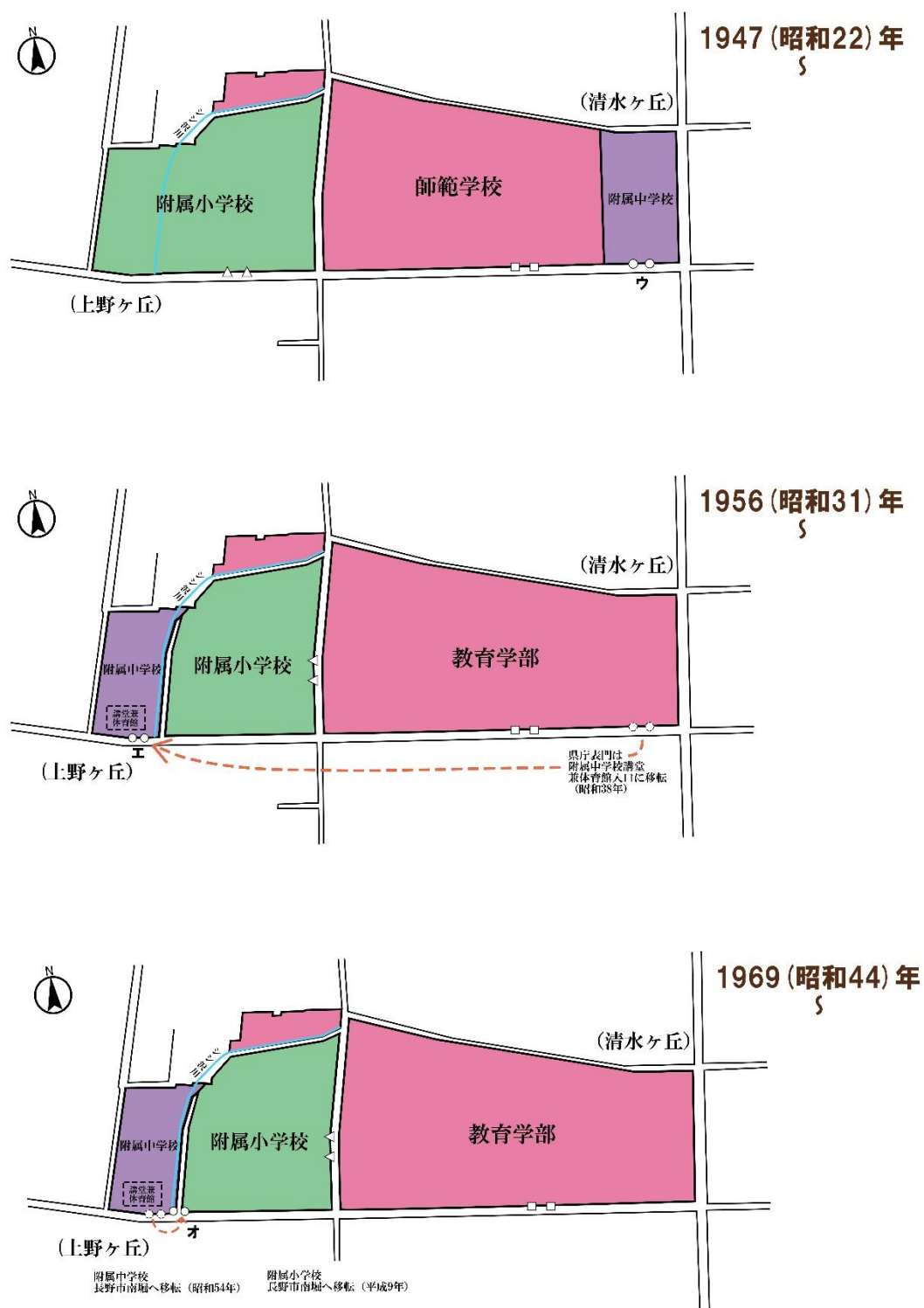


図3 長野（教育）キャンパスの移りかわり（作図 田中圭美）

※図中のア～オは、写真10、11、12に対応する。

信州大学教育学部附属長野中学校五十年史「教育学部本校土地略図」p. 368 をもとに作成。

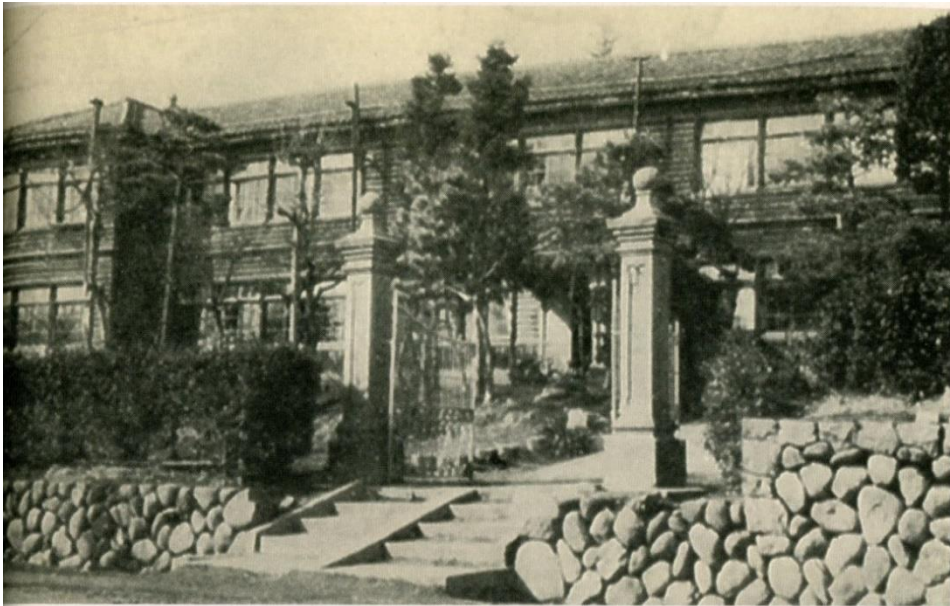


写真10 キャンパス東側（清水ヶ丘）の県庁表門を校門としていた時代（図3-ア・イ・ウ）
 ア 明治41年～昭和16年：附属小学校校門、
 イ 昭和16年～22年：師範学校東門、
 ウ 昭和22年～31年：附属中学校（正門）

昭和31年頃から37年頃までの間：教育学部南校舎建設のために撤去され、しばらくは門柱として利用されず、事実上の廃棄状態にあった（『信州大学教育学部附属中学校五十年史』）。



写真11 キャンパス西側に建設された附属長野中学校の講堂南側に設置（図3-エ）

昭和38年：一時撤去されていた門を講堂南に設置

大学史としてのキャンパス前史（1）― 旧長野県庁とその表門 ―



写真12 キャンパス西端（上野が丘）時代の正門（図3-オ）

昭和42年：シシ沢川東に移転（写真は昭和44年）



写真13 昭和54年、附属長野中学の校舎移転に伴い、門柱を移設。北口通用門に。

おわりに—今後の課題—

以上、本稿では大学キャンパス研究の最初の試みとして、長野（教育）キャンパスを取り上げ、特にこの地に最初に作られた県庁舎と表門について、建築資料と画像資料を素材に検討を加えた^{注25)}。

言うまでもなく、歴史は過去から現在へと様々な事象が重層的に積み重なって構成される。永く形を留めるものもあれば、時代の流れの中で形もなくなり、人々の記憶からも失われていくものも数多く存在する。そのすべてを記録することは不可能に近いが、現在の私たちの生活が、社会が、これらの積み重なる過去によって支えられていることを考えると、自分たちの足元に埋もれているものが、埋蔵文化財だけでないことに気付かなくてはならない。

今回、長野（教育）キャンパスを取り上げて、明治の県庁舎の存在した時代に焦点をあてて考察を加えた。県庁の2代表門が、師範学校附属小学校時代の正門として使われ、戦後のキャンパス整備の中で廃棄の危機を乗り越えて、再び附属中学校の正門として、あるいは通用門として、そして保存すべき門として大切に扱われてきた歴史をたどることができた。

それぞれの時代にこの門に関わり、後世に残そうとした先人の営みについては、資料の制約で今回明らかにできなかったが、大学キャンパスの歴史をたどることが、大学自身の歴史をたどることと同様に重要なことに気付くことができたことは大きな収穫であった。

こうした過去から引き継がれ、後世に伝えるべきものがそれぞれのキャンパスに残されている。それらを一つ一つ記録する作業が残されている。

注

- 1) 拙稿「信州大学大学史資料センターの設置とその活動」（『信州大学附属図書館研究』7号 2018年1月）
- 2) 学術情報・図書館委員会大学史資料センター検討部会報告書『信州大学大学史資料センターの活動評価及び今後の展開について』（2019年11月）。
<http://hdl.handle.net/10091/00021785>
- 3) 詳細は別に論ずる必要があるが、とりあえず文部省『学制百年史』1972年、文部科学省平成18年度『先導的大学改革推進委託事業』「今後の「大学像」の在り方に関する調査研究：校地・校舎」（文部科学省高等教育局大学振興課・東京工業大学教育環境創造教育センター 平成19年3月）、生田国男、藍澤宏「戦後国立大学におけるキャンパス整備の実態・方針とその史的評価」（『日本建築学会計画系論文集』623号 2008年）、今村洋一「戦後日本における旧軍用地の学校への転用と文教市街地の形成について」（『都市計画論文集』Vol. 49 No1 2014年）などを参照。
- 4) 松本キャンパス、長野（教育）キャンパス、長野（工学）キャンパス、伊那キャンパス、上田キャンパス

大学史としてのキャンパス前史（1）― 旧長野県庁とその表門 ―

- 5) 1973年まで、文理学部及び改組された人文学部・理学部のあったキャンパスは旧制松本高等学校の敷地で、県キャンパスと呼ばれていた。現在は松本市の管理となり、敷地はあがたの森公園に、本館・講堂は重要文化財に指定され、公民館・図書館として活用されている。
- 6) 『長野市史』1925年刊による
- 7) 長野県庁、師範学校、教育学部のキャンパスの変遷については、文末に図3として示した。
- 8) 『信州大学教育学部九十年史』や『信州大学教育学部附属中学校五十年史』などで記述されている。特に後者のコラム「歴史と風土」に「最初の県庁正門遺構は当校へ」と題した考察（中村一雄執筆）があり、県庁表門が附属長野中学校で保存されるようになった経緯が記されている。ただし、若干の訂正を要する部分があることは本文で触れる。
- 9) 『長野県史』通史編第7巻近代1（長野県史刊行会 1988年）
- 10) これ以外に、県庁舎の建設に携わった中野の山田庄左衛門に関する文書など、周辺の資料については、山田正子「県都の創建―明治七年（一八七四）長野県庁を建てる―」（『高井』214号 2021年）を参照。
- 11) 以下、これらの資料を指す場合は、表1-1のように表記する。1~9については写真1も参照
- 12) 小林英一「長野県庁新築の社会史」（『長野』132号）。同氏『長野県史』通史編近代1 第2章第1節1参照。以下、小林氏の研究はこの論文のことを指す。
- 13) 太政類典・第2編・明治4年～明治10年
- 14) 表1-4
- 15) 表門は当初伝統的な冠木門を予定し、その設計図もあるが、折からの洋風の流行から、西洋風の門に変更したことが知られる（表1-4）。
- 16) 『長野』86号（1979年）口絵
- 17) 写真3では「表門外通用門三ヶ所」とあり、表門を含め門は4か所あったことがわかる。一方、設計段階のものと思われる図2では、敷地南側に2か所の門が描かれている。また、表2の画像Bでは南側2か所と東側1か所が描かれている。資料によって若干の違いがあるが、南側に門が2か所（表門と通用門）あったことは確かであろう。
- 18) 「郷土資料陳列室所蔵」資料は、現在県立歴史館と県立長野図書館に分蔵されている。本資料は他の信濃御巡幸関係資料とともに県立長野図書館に所蔵されている。なお、当該所蔵品目録は国立国会図書館デジタルコレクションにて参照可能。
- 19) 『信州大学教育学部附属長野小学校百年史』281頁第6図「附属小学校新校舎配置図」によると、運動場の中に石垣が東西に走っていることがわかる。これは、画像A・C・Eなどで確認できる表門から庁舎に行く途中にある石垣であろう。明治41年の火災後も石垣が残されていたことがわかる。
- 20) 石材の種類について今後の課題である。
- 21) 長野町に電灯が灯るようになったのは明治31（1898）年5月11日からである（『長野市史』

1925年刊)。

- 22) 写真9の門柱の上部に3つの穴を埋めた痕跡がある。上二つがアーチ状の金具を取り付けた痕跡、下一つが門扉を取り付けた痕跡であろう。なお、門扉についてはこのほか2か所の取り付け箇所が確認できる。
- 23) 明治初期の屋外で用いられる石油ランプについては、道路や通路の脇に照明用に用いる街灯的なものと、門柱に付ける門灯などに分けられるが、明治初期は銀座など一部にガス灯が作られたものの、ほとんどが石油ランプであった。長野県におけるこうした街灯の普及については今後の課題だが、門柱に石油ランプが付くことが流行したように思われる。いくつかの画像を提示する(写真13~17)が、これらに共通するのは、門柱に取り付けた金具に対して上部に笠付きの器具が取り付けられていることである。石油ランプであれば当然のことであろうが、一方、画像H・J・Kはアーチ型の金具に対して下向きに取り付けられており、ランプも下向きに付いている。電灯であればこうした形になるのは理解できる。なお、明治期のランプ(石油、アーク灯、ガス灯、電灯)の詳細は今後の課題としたい。



図2 創建当初の旧開智学校校舎

写真13 旧開智学校校舎の正門の石油ランプ(1876(明治9)年)
(出典: 国宝旧開智学校校舎)

大学史としてのキャンパス前史（1）― 旧長野県庁とその表門 ―



写真14 洗馬学校校舎の正門の石油ランプ（明治初期）
（出典：国宝旧開智学校校舎）

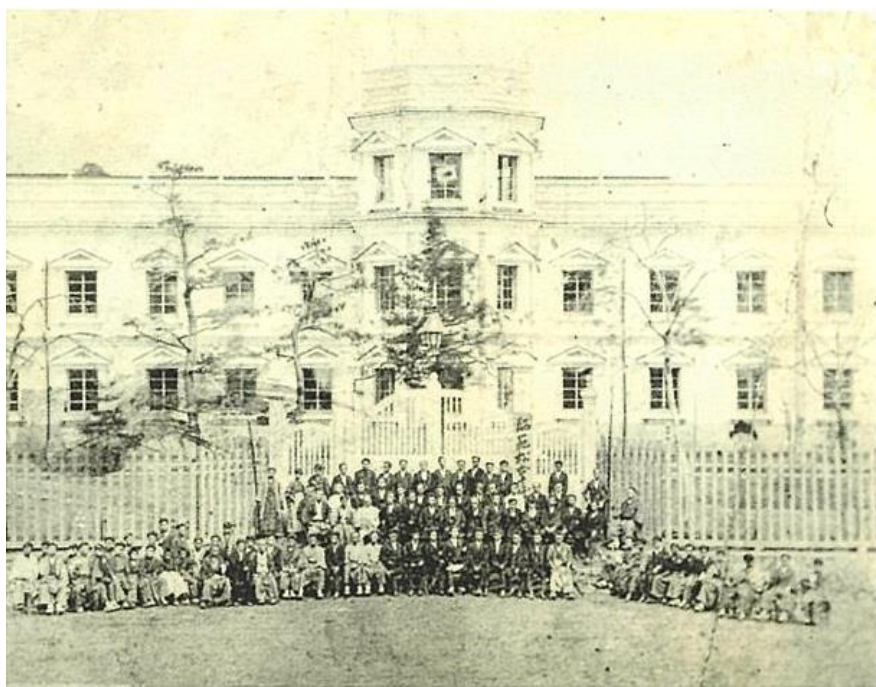


写真15 筑摩県（長野県）師範学校校舎の正門の石油ランプ（明治初期）
（出典：国宝旧開智学校校舎）



写真16-1 「松本中学校開校式繁榮之図」にみえる正門の石油ランプ（明治18年）



写真16-2 同上 拡大

大学史としてのキャンパス前史（1）― 旧長野県庁とその表門 ―



写真16-3 「松本中学校開校式繁栄之図」にみえる長野県師範学校（明治18年）



写真16-4 同上 拡大

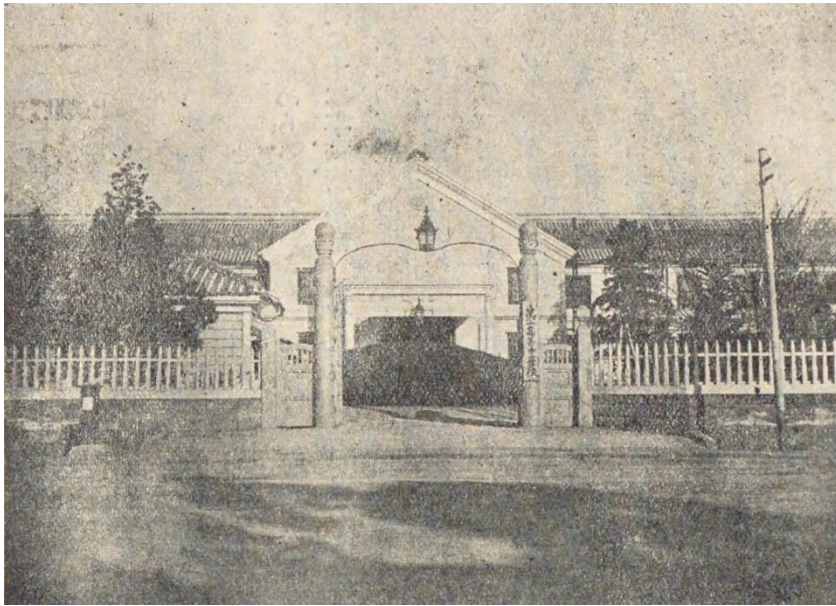


写真17 第一高等中学校正門と石油ランプ
 (出典：wikipedia「第一高等学校(旧制)」パブリックドメイン)

- 24) 管見では、鹿児島県始良市の重富小学校正門が1880年の旧鹿児島県庁正門を移設したものであることが知られる。
- 25) キャンパスが立地する西長野地域の近代の歴史については、『西長野百年史』(西長野町百周年記念事業実行委員会刊 1982年)がある。地域の歴史の中にキャンパスの歴史を位置づける作業は別途行う必要がある。

付記

脱稿後、重要文化財・史跡 中込学校に関し、明治9年に柳澤文眞が描いた絵、明治38年の銅版画の中の正門の門柱にランプが描かれていることを知った(佐久市教育委員会 生島修平氏の御教示による)。

また、「石油ランプ(石油ガス灯)」の現物資料として、山崎ます美『燈火・民俗見聞』(ほおずき書籍 2006年)に収録された「日本のあかり博物館館報」3号の「北信濃に”ガス灯”が灯る」に同博物館所蔵資料の写真が掲載され、北信濃の石油ランプ(石油ガス灯)について紹介していることに気づいた。あわせて参照いただきたい。